

研修カリキュラム（2）

事業名： CINGA日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業

団体名： 特定非営利活動法人 国際活動市民中心

時間数： 3時間×5回 合計15時間

1-1 研修各回の流れ

第1回「学習者の背景理解」「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」

目的	1. 研修のねらいを理解する 2. 学習者の背景についてデータを元にして理解する 3. 文化について体験を通して考える
----	---

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	研修実施団体, 研修担当者紹介	講義		
5		研修目的, 研修内容, 研修方法, スケジュール等説明	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める 以後の研修の円滑な実施を図る	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
10		研修の背景説明(システム図等)	講義		
15	アイスブレイク	自己紹介と自身の活動紹介	グループワーク	対話的なアイスブレイクを実施することで, アイスブレイクの機能と対話的活動の体験という二つの意味を持たせる	活動に対する心理的抵抗感の軽減による学習動機の向上(A-1)
27	目標設定	資質・能力の確認	グループワーク	目標を明確化することで一人一人の講座を通じた学びの質を高める	目的の明確化による学習動機の向上(A-3), ゴールの明確化による「できそうだ」という見通しの提供(C-1)
37	学習者の背景理解	日本全体の状況(訪日外客数, 在留外国人数, 在留資格別外国人数, 日本語学習者数等)	クイズ&講義	日本語学習支援の背景にある社会的状況を理解することで, 何のために支援活動を行うのかという大きな視点を持ってもらう	
50		実施地域の状況(実施地域の施策, 外国人の日本語学習の実態等)	講師と実施地域担当者の対談	港区の状況を理解することで, 何のためにどのような支援活動を行うのかという具体的な視点を持ってもらう	クイズによる「考える」時間の確保(A-3), 自分なりに答えを考えることに積極的に取り組むきっかけ(R-2), ゴールイメージの明確化(C-1)
65		教室紹介	動画視聴		
70	確認	質疑応答			疑問や興味関心に答えることで学んだことを構造化する(R-1)
	休憩				
80	文化に関するワークショップ	レヌカの学び	グループワーク	文化理解について考える前提として, 人間は多様な文化を持ち, 移動を通してその多様性は拡大していることに気づく	事例に触れる, 考えるという経験を通して文化理解に対する具体性を高める(A-1, A-2, R-1, R-2)
120	ふりかえり1	ワークショップでやったことを確認	個人作業	個人での省察, 協働での省察を通して, レヌカの学びは参加者一人ひとりにも起こっている学びであること, 文化理解は他文化理解にとどまらず, まずは自文化の多様性への理解から始まること, に気づくこと	自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-2)
135		何を学んだか意見交換	グループワーク		
150	まとめ	文化とは何か	講義	文化とは, 多文化共生とはなど, 講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通じた学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
165	ふりかえり2	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」 前半

目的	1. コミュニケーションスキルについて理解し実践できるようになる(やさしい日本語)
----	---

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり、研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで、研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15		レディネスのチェック(自分の話し方についてのふりかえり)	講義	自分の日常の話し方に目を向けるとともに, 受講者それぞれの話し方があることに目を向ける	自分ができることを意識化する(R-1, C-1)
20	やさしい日本語に関する理解(理論面)	やさしい日本語の概要がわかる映像紹介	ビデオ視聴	やさしい日本語の概要を把握	やさしい日本語の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
24		やさしい日本語に関する基本的な知識(定義, 使用場面, 書換例等の提示)	講義	やさしい日本語の様々な使用場面を知る	
30	やさしい日本語に関する理解(実践面)	日本語学習者のスピーチビデオを視聴	ビデオ視聴	やさしい日本語の実際を知る	
38		ビデオの内容をもとに観点を絞って意見交換(文の長さ, わかりやすさ等)	グループワーク	やさしい日本語のルール説明の前段階として, 自らが感じた印象と気づきを言語化し, グループワークで気づきをシェアする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確認する(C-2)
46		やさしい日本語書き換えワーク	グループワーク	やさしい日本語のルールを知る	自分ができることを意識化する(R-1, C-1)
60		情報伝達の演習(災害情報をわかりやすく伝える練習)	ペアワーク	・生活に密着した情報を, 目の前にいる「個」(ここではビデオの日本語学習者)に合わせたやさしい日本語にするにはどうするかを考える ・生活密着情報の教材として市の数種の広報を使用することで, 情報源の紹介機会とする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 身につけたことを使う機会を確保する(S-1)
70	まとめ	やさしい日本語とは何か	講義	講座の内容を整理し, 相互理解のためのやさしい日本語についての学びの定着を高める	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起(Perceptual Arousal)	C-1 学習要求(Learning Requirement)
	A-2 探究心の喚起(Inquiry Arousal)	C-2 成功の機会(Success Opportunities)
	A-3 変化性(Variability)	C-3 コントロールの個人化(Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
R-1 親しみやすさ(Familiarity)	S-1 自然な結果(Natural Consequences)	
R-2 目的指向性(Goal Orientation)	S-2 肯定的な結果(Positive Consequences)	
R-3 動機との一致(Motive Matching)	S-3 公平さ(Equity)	

第2回「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」後半

目的	1. 日本語学習支援の考え方について理解し実践できるようになる 2. コミュニケーション教育について理解する
----	---

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機向上(A-2, A-3)
5	聞くことに関する理解	「聞く」ワークショップ, 3種類の聞き方について体験した上で話し合う	グループワーク, ペアワーク	話しやすい環境とはどんなものか, 支援者に体験的に理解する	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確認する(C-2)
40		ワークショップふりかえり(録音したものの確認と感想共有)	グループワーク	聞くことによるコミュニケーションの活性化の具体例を知る	聞く活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1), 聞くことに実際に取り組む(S-1), 自分なりの学びを確認する機会の提供(C-1)
55	コミュニケーション教育に関する理解	聞くことと「同化」「共生」の関係について知る	講義	共生社会実現のために聞くことが果たす役割を考える	自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
70	まとめ	対話を通して日本語学習支援の考え方について確認する	講義	講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通じた学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
75	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起 (Perceptual Arousal)	C-1 学習要求 (Learning Requirement)
	A-2 探究心の喚起 (Inquiry Arousal)	C-2 成功の機会 (Success Opportunities)
	A-3 変化性 (Variability)	C-3 コントロールの個人化 (Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
	R-1 親しみやすさ(Familiarity)	S-1 自然な結果 (Natural Consequences)
	R-2 目的指向性 (Goal Orientation)	S-2 肯定的な結果 (Positive Consequences)
	R-3 動機との一致 (Motive Matching)	S-3 公平さ(Equity)

第3回 「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」

目的	1. 日本語学習支援における対話的活動について理解する 2. 対話的活動を通じた日本語使用について理解し実践できるようになる
----	---

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり、研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで、研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	対話について理解する	共通点探しワーク体験	グループワーク	・日本語の力が限られた学習者を相手にした時でも対話を活性化するアクティビティの体験をし, 対話を活性化する方法をイメージできるようにする	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1), ワークの内容を実践に役立てることを考える(S-1, S-2)
35		ワーク体験の発表	グループワーク	・市民活動としての日本語学習支援の核が「対話」であり, 対話を通して相互理解・文化理解が深まり,	自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
50		ワーク体験のふりかえりとディスカッション(ワークで使いやすい日本語, ワークの効果)	グループワーク	ともに学び合うことができること, そして それぞれが, ともに社会をつくっていく出発点となることが意識できるようにする	自分ができていることを意識化する(R-1, C-1)
65		対話についての理解(対話理論等の説明, 実践事例の紹介)	講義	・活動の体験を, 在住外国人の状況, 「文化」「多文化共生」「やさしい日本語」「聴く・待つ」と結び付けて考えられるようにする	自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
80		体験したワークの実践への応用を考える	グループワーク		学んだことが実践に役立つことを感じる(R-1), 身につけたことを生かすことを考える(S-1, S-2)
95	休憩				
105	対話的活動実践のための具体的な取り組みの検討	対話的活動にふさわしいトピックについて(言語的側面と文化的側面)	グループワーク		
115		対話的活動に使いやすい素材, 教材	講義	・さまざまなトピックで, 対話を活性化する方法をイメージできるようにする ・対話を活性化するリソース(教材)の例にふれ, イメージできるようにする ・対話を広げたり深めたりするための, コツ, 留意点について意識できるようにする。	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
130		対話的活動の具体的な進め方	講義, ペアワーク, グループワーク		
145		対話的活動の応用(話を広げていく方法)	ペアワーク		学んだことが実践に役立つことを感じる(R-1), 身につけたことを生かすことを考える(S-1, S-2)
160	まとめ	日本語教室のゴール, 対話的活動と日本語・文化について	講義	講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通じた学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
170	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができていることとできないことの明確化(C-1)

第4回「相互理解を深めるための地域日本語教室の実践」

目的	1. 地域日本語教室の多様性について理解する 2. 地域日本語教室の実践について理解する 3. 日本語学習支援活動の実践ができるようになる
----	---

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既知知識を活性化したり、研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで、研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的、内容、方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ、講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1)、目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	学習者について理解する	事例団体概要紹介	講義	「教える-教わる」の関係ではなく、「相互理解と文化理解」を目指した団体の具体的な活動の様子、参加する外国人(学習者)の生の声を知り、地域日本語教室の活動についてイメージがもてるようになる	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
25		学習者インタビュー視聴	ビデオ視聴		
35		視聴の感想ディスカッション、共有、講師コメント	グループワーク		
50		支援活動視聴	ビデオ視聴	参加者皆が、楽しく対等な立場で活動に関わる様子を知り、地域日本語教室の活動参加へのモチベーションを高める	支援活動の具体的なイメージができるようにする(A-2, R-1)
60		視聴の感想ディスカッション、共有、講師コメント	グループワーク		自分なりの学びを確かめる機会の提供(C-1)
75	休憩				
85	日本語学習支援の実践活動体験	外国人協力者との「共通点探し」ワーク	グループワーク	講座受講者同士で経験した(対話を活性化する)活動を、外国人協力者と共に体験することにより、活動を進めるために必要なやりとりや配慮など、新たな気づきを得る	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2)、自分のやりやすい方法を見つける(R-3)、自分の気づきを確かめる(C-2)、目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
110		ワークのふりかえり	グループワーク		
120		外国人協力者との「一文字書道」ワーク	グループワーク	これまで学んだ「聴く・待つ」「やさしい日本語」「対話」を意識しながら、外国人協力者と共に新たな活動を行いながら、日本語学習支援についての理解を深める 「教える-教わる」ではなく、「相互理解と文化理解」を目指した活動の面白さや楽しさを実感することで、活動参加へのモチベーションを高める	効果的な活動をわかりやすく示す(A-2)、活動を具体的にイメージし積極的に取り組めるようにする(R-1, R-2)、活動のゴールをわかりやすく示すことに触れる(C-1)
140		「一文字書道」作品閲覧	ギャラリーウォーク	参加者一人一人の様々な想いにふれ、それをきっかけに対等な立場で対話を展開させ、日本語学習支援の活動について理解を深める	全体で作品を見合うことで実践でもできそうだという達成感を得る(R-2)、他の人の作品を見ることで自分自身のできることや学んでいることを改めて意識化する(C-2)
150		ワークのふりかえり	グループワーク	共に活動をふりかえり、体験から得た気づきを言語化し、整理できる	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
160	まとめ	日本語学習とは、日本語学習における文化とは	講義	講座の内容を理論的に整理することで、体験を通した学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
170	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し、各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)

第5回「コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」」

目的	1. 講座で学んだことの全体像が整理できる 2. 今後の支援活動についての自分なりの見通しが持てる
----	--

時間	内容(大項目)	内容(中項目)	活動形式	講師の意図	ARCSモデルによる分析的視点
0	イントロダクション	前回のキーワードや資料等の再確認によるふりかえり	個人作業	既有知識を活性化したり、研修内容の積み重ねと連続性の意識を高めたりすることで、研修の質の向上を図る	学んだことの確認・チェック(S-1, S-2)
10		今回の講座の目的, 内容, 方法の確認	講義	講座の目的や全体像をつかみ, 講座に対する期待度や動機付けを高める	受講者に興味を持ってもらう(A-1), 目的の明確化による探究心の向上や学習動機の向上(A-2, A-3)
15	教室見学のふりかえり	講座の課題として課されていた「地域の教室見学」のふりかえり	グループワーク	見学によって得たことを思い出し, 次の講義のための既有知識の活性化を行う	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確認する(C-2)
30		地域の日本語教室のあり方について	講義	地域日本語教室のあるべき方向性について理解する	自分が果たす役割や解決できる課題を自分ごととしてとらえる(R-2)
35	講座全体のふりかえり	講座の各回のふりかえりシートの内容を踏まえ, 講師が質問・疑問等に答える	講義	講座全体での疑問等に答えることで, 学びの深まりを図る	疑問や興味関心に答えることで学んだことを構造化する(R-1)
55		各自が毎回記入したふりかえりシートをもとに個人で改めてふりかえり	個人作業	グループワークのための既有知識の活性化を行う	自分の気づきを確認する(C-2)
60		グループでふりかえりの共有, 目標達成や学んだことについてディスカッション	グループワーク	ふりかえりを共有することで, 学びの経験を共有し, 新たな視点や学び方につづく	自分の気づきを確認する(C-2), 目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
80	休憩				
90	学習支援活動について考える	具体的な学習支援活動の案を考える	グループワーク	前4回の講義の内容も踏まえて学習支援活動の素材をつくることで, 支援活動を自立的に行えるようにする	課題を自分ごととして積極的に取り組む(R-2), 自分のやりやすい方法を見つける(R-3), 自分の気づきを確認する(C-2), 目標達成の実感を得る(S-1, S-2)
120		考えた活動の共有	ワールドカフェ	支援活動案を共有することで, 支援の内容や方法についてより広く深く考えられるようにする	
150	まとめ	体験とふりかえりを通して学ぶとは	講義	講座の内容を理論的に整理することで, 体験を通じた学びの定着を図る	体験的に学んだことの重要性の確認と理解(S-2)
160	ふりかえり	アンケート記入等	個人作業	自分自身が取り組んだことをふりかえることで学びの成果と課題を明確化し, 各自の学びの質を高める	自分ができることとできないことの明確化(C-1)
175	クロージング	今後の活動に関する情報提供, あいさつ			ひとまとまりの研修を終えた達成感を得て, 次の活動へとつなげる(S-2)

ARCSモデル	注意(Attention)	自信(Confidence)
	A-1 知覚的喚起 (Perceptual Arousal)	C-1 学習要求 (Learning Requirement)
	A-2 探究心の喚起 (Inquiry Arousal)	C-2 成功の機会 (Success Opportunities)
	A-3 変化性 (Variability)	C-3 コントロールの個人化 (Personal Control)
	関連性(Relevance)	満足感(Satisfaction)
	R-1 親しみやすさ(Familiarity)	S-1 自然な結果 (Natural Consequences)
	R-2 目的指向性 (Goal Orientation)	S-2 肯定的な結果 (Positive Consequences)
	R-3 動機との一致 (Motive Matching)	S-3 公平さ(Equity)